



図書館だより

第5号 平成13年1月発行
弓削商船高等専門学校図書館



ブックディテクションシステム

目次

自分の本の読み方を探そう	商船学科 多田 勝	2
書の点景	総合教育科 神谷 正彦	3
司馬遼太郎「街道をゆく」の跡を訪ねて	総合教育科 山尾 徳雄	4
読書の魅力	商船学科3年 松本 大輔	5
読書の魅力	情報工学科2年 山根美円子	5
趣味を持つこと	会計課 東 嘉美	6
読書感想文優秀作		6
編集後記		6

自分の本の読み方を探そう



商船学科 多田 勝

われわれは毎日、無数の本を手にとり、目にしています。

その中には万感の思いをこめ、心の底からしぼり出して作った本もあれば、ふと思いついた事柄を軽い気持ちで述べた本もあります。

どのような本にめぐり会うか、によって、その人の世界が大きく左右されることがあります。我々は、無数の本の中から、どのような本の前で立ち止まり、その本から何を汲み出すか、を、もう一度考えるべきでしょう。本は、それぞれの人の生きた証となるものと思われれます。

しかし、皮肉なことに、現代の社会は「情報化」とともに、本の重みを急速に奪ってしまいました。本の流通は、かつてないほど容易になり、多量になり、それとともに本来の価値を失い、本は手軽な「道具」として扱われるようになっていきます。マス・メディアを通じて、雨アラルのように降り注ぐ本・本…。

とうぜん、人びとは真面目に本と向き合うこともなく、オヤ、と注意を向けることはあっても、次の瞬間には、もう忘れていきます。心に深く感動を与えることもなく、つぎつぎに流れ去っていきただけのようになっていきます。

本が今日ほど乱雑になり、塵のように軽くなった時は、かつてなかったでしょう。けれど、本は、まだまだその力を失ってはいません。味わい深い本、人生を語る本、生き方を示唆する本、気付かぬことを悟らせてくれる本、知恵を授けてくれる本、心を癒してくれる本…このような珠玉の本は、本の砂の中にそっと埋もれています。

私はこのような本を探して、これまでずいぶん「本の旅」を重ねてきました。

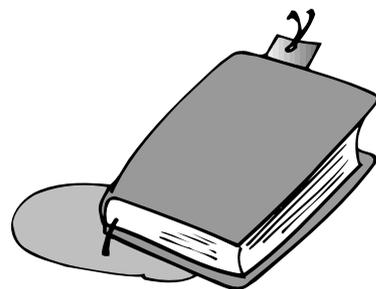
高校では、宿題を兼ねた文学への誘いであったのですが、国語の先生から、読むべき本のリストを示されました。いわゆる名作といわれる作品をよく読みました。古典から近・現代の文学がほとんどでした。

またその先生自ら団長となり、夏休みなど長期の休日を利用し、徳島、香川、奈良、京都、和歌山等を自転車でグループ旅行をし、いわゆる名作の地を散歩したことが、読書好きの基になったと思われれます。堀辰雄の「大和路・信濃路」、「風立ちぬ」等の世界に心ひかれるようになったのも、その影響です。今も時々この作品の世界に遊び、心を癒しています。

それ以来、大学、社会人といろんなジャンルの本を目にしてきました。特に、いま心に残っている作家は、ノンフィクションの分野では、現代科学技術、医療技術等の幅広い分野を見つめ、鋭い意見を述べている柳田邦男、スポーツの世界で独特の分野を取り上げている後藤正治、また、それぞれ現代の世界を旅して、独自の視点でその世相を書いている沢木耕太郎や藤原新也等です。また、その他の分野では、幅広い歴史小説や評論の司馬遼太郎、中国の春秋・戦国時代を描いた宮城谷昌光、歯切れのよい文章で魅了する池波正太郎等が印象に残っています。今もこれらの作者の世界に関心を持ち、挑戦をしています。

私の本の読み方は、ある一つの作品を手に取り、深い感銘を受ければ、さらにその作者の他の作品群を読み進むということで、いつしかその世界にはまり、それに関連する分野の他の作者、作品に関心が向かうようになっていく連鎖反応のようなやりかたをしています。このような方法で本を読むと、長い間に自然と本を読むという習慣がつくのかもしれません。

少しでも興味のある、おもしろいと思った本を手に取り、心に訴えてくる文章や言葉を一つでも記憶するように心がけると、いつしかより広い世界を探ってやろうとする気持ちが生まれることと思います。一度ためしてみてください。



書の点景



総合教育科 神谷 正彦

いつの時代にも、読む人の心を打つ書というもの絶えることはありません。そのあるものは、同じような体験を持つ読者の共感を呼び起こし、またあるものは作中の主人公の体験に読者が同化してしまう、というように書物の繰り広げる世界は読者にとってじつに魅惑に満ちたものです。

ここでは、私のささやかな読書遍歴の中から一冊を選んで御紹介しましょう。

石川恭三著「医者目に涙 ふたたび」(集英社刊)

「生老病死」を四苦と言いますが、突然、余命を宣告された人の苦しみは想像を絶するものがあります。それまでは自分とまったく無関係であった極限状況にいきなり追い込まれた末期癌患者たちのたどった、不安・焦慮・絶望。そういう人々の姿に日常的に接している「医師」の眼は、時として医療技術の限界を自覚する無力感に曇りながらも、絶望の淵から立ち直って残された日々を精いっぱい生きようとする、いくつかの「澄みきった精神」をとらえてゆきます。一例を紹介しましょう。これは肺の扁平上皮癌で余命半年と宣告された方の場合です。彼は従業員20人ほどの小さなコンピュータ部品製造会社を営んでおり会社のことはすべて一人で切り回していました。

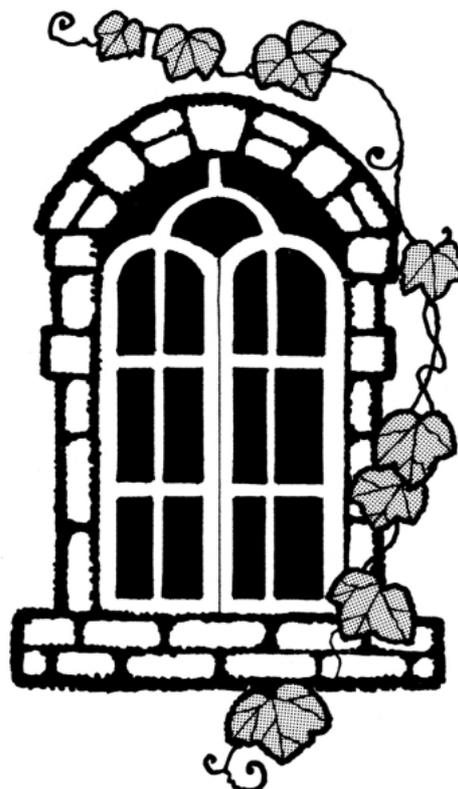
しかし癌が見つかり、外科的治療も手遅れと知ったとき、彼は何としてもこの会社を守らなければならないと決意しました。彼は自らの意志で退院し、痛み止めを打ちながら、何とか半年の間に奥さんを業界に通用する一人前の社長に育て上げるための戦いを始めます。(息子さんはまだ大学生だったのです)それはまさに、癌との戦いというよりも、「時間」との戦いでした。その当時のきびしい状況を奥さんはこうふりかえています。

「主人がモルヒネで痛みを押さえながら、声を枯らして私に教えてくれるものですから、私

だって必死にならざるを得ませんでした。でも、はじめのうちはもう何が何だかさっぱり判らないものですから、へまばかりしまして、主人にどなられ、何度かぶたれました。そんなとき、くやしくて主人を睨み返しますと、主人の目に涙が浮かんでいるんです。その目は“お前にこんなことをさせるようになってしまって、すまん”と言っているように思えました。」

ぶちたくてぶっているのじゃない、俺には「時間」がないんだ この、彼の魂の悲痛な叫びは、むしろ崇高な求道者の意志さえも感じさせます。そしてそんな彼の最後の意志は生前のうちに実現されたのでした。

作者は、人の死を看取る医師というよりは、死への旅立ちを優しく導いてくれる僧のように慈愛に満ちた姿勢で患者に接しており、私たち読者の誰もがやがて迎える最期への不安を和らげてくれる書となっています。



司馬遼太郎「街道をゆく」の 跡を訪ねて



総合教育科 山尾 徳雄

先日、長崎県の平戸を旅行する機会に恵まれた。司馬遼太郎の「街道をゆく」という本の「平戸の蘭館 肥前の諸街道 六」から「宮の前の喧嘩 肥前の諸街道 十二」に書かれている辺りである。歴史、現場の具体的記述は格好の旅行ガイドであった。

平戸は長さ40キロ、面積170平方キロ弱の一見、タツノオトシゴの形をした、わずか600メートルとはいえ、九州本島から離れた島であった。「平戸の蘭館」によれば、司馬氏一行（知人、出版社の人等）は、平戸口からフェリー・ボートに乗って平戸島に渡ったようである。司馬氏が乗船したフェリーは、平戸島の北の端を通って平戸港に入って来たと思われる。岬を回ると松浦海賊活躍の時代さながらに湾の左右の景色を見ることが出来たであろう。天下一品の景色を愛でていた司馬氏の気分を逆なでしたのが、緑を破って城の下にでんと座ったコンクリートの大きな建物であった。私は、昭和45年4月に架橋された赤い平戸大橋を通り、ものの5分程で、平戸島に渡ったので、あれこれ感慨に耽る間もなく、また、城の景観を台なしにすると司馬氏が憤慨された不粋な建物も山の陰になって目に入らなかった。オランダ商館付近に司馬氏が感心したオランダ埠頭がある。黒っぽい石が規則正しくしっかりと積み上げられていて、いまだにずれたり弛んだりしたところがない。日本オランダ交流4百周年の年ということで、長崎県では、観光に力が入られていた。そして、この埠頭近くにオランダの三色旗と常夜燈の組み合わせが再現されていた。さらに、オランダ商館跡地の一角にはオランダ商館の模型が置いてあった。かなり横長である。そこから少しバスターミナル側に行った右側にオランダ井戸がある。掲示があるのですぐに分かる。井戸の枠はかなり大きい。司馬氏の言う2メートルにかなり近いのではないか。手前に大きな石碑がある。あまり高さはないが、厚い石が使っている。ア

ルフアベットで何やら書いてある。井戸の中を覗くと地面から1メートル程の所まで水がある。司馬氏の言う「光の届く限り」といった光景は見ることができなかったが、水面から少し上がった側壁の部分には、羊歯と緑色のコケが生えていた。水は白く濁っていた。そのすぐ先、道路を挟んだ向い側に篠原土産物店があった。店の一方の壁に黒い玄武岩がほぼ同じ厚さに切られて積み上げられている。ところどころに茶褐色の箇所が見えるが、これが司馬氏の言うレンガであろうか。その数は、あまり多くはない。壁の上部には、簡単な説明文がかけてある。それによると、司馬氏が、訪問された頃、オランダ倉庫の壁と言われていたこの石積みは、昭和62年の発掘調査の結果、1610年代に築造された境界塀の可能性が強くなったとのことである。そこから10メートル程進んだ右側にオランダ塀がある。2度程折れ曲がって30メートルあまり続いているであろうか。たしかに、「目隠し」と言うにはがっちりとしている。基部の一番厚みのある所は1メートル近くあるようだ。鉄の玉を飛ばすだけの旧式の大砲による攻撃にはかなり効果があるかも知れない。オランダ塀には、貝の粉に油をまぜたしっくい固めているとの説明書きが付いている。崎方公園から、民家の前、私道のような細い道を辿って行くとふいに石段にぶつかった。上の方に大きな石垣がある。石段下の表示を見ると「お部屋の坂」となっている。坂を降り切って平地をさらに行くと目前にりっぱな石段の道が広がった。塀も石垣も豪壮である。松浦史料博物館への登り口であった。左、右と90度に二度曲がると正面に門が見える。建物の入り口も板のローカで、明治26年松浦氏の私邸として建てられたものがそのまま使われている。司馬氏は、江戸期の建物と考えられたようであるが、そこまで遡るものではない。古風であるが、どっしりとした作りである。博物館の左隣には、元禄期、松浦鎮信（松浦氏最盛期の道可の子息とは別人と思われる）が開いた鎮信流の茶道稽古道場である茶室閑雲亭がある。昭和61年に台風のために潰れた後、利用可能な古材を使って立て直したものである。抹茶をいただいて、雨のしのつく蒸し暑いなか、傘と荷物を持っての平戸探訪はさらに続いたのであるが、紙面が尽きたので筆を置くことにしたい。

読書の魅力



商船三年 松本 大輔

ちょっと忙しくなると読書の時間をけずって、結局そのまま数日または数週間、ヒドイときには何ヶ月も先まで本を読まないなんてことはよくあることだ。だけど、そのままずっと読書をしていないというケースはほとんどないだろう。その内必ずといっていいぐらい、人はまた本を読みたくなるのだ。なぜか？それは簡単なことだ、読書には人を虜にして止まない魅力があるからだ。

では、その魅力とは一体何か？もちろん人によって違いはあるけれども、誰でも簡単に仮想体験ができるというのがその最たるものだろう。本に書かれているのは基本的には文なのだ。写真や挿絵が載っているものもあるが、あくまで主体は文なのだ。そして、これを読むことによって自分の頭の中に、刻一刻と移り変わる場面を展開していくのだ。しかも、この場面設定は読み手の好きなようにできるのだ。たとえ細かい描写がされていてもそのイメージは読み手のもので、書き手のイメージしたものとは少なからず一致するにしても全く一緒にはならないはずだ。これは読み手どうしても同じことだ。風景から登場人物まで全てが自分の思い通りになるのだ。つまり、読者は映画監督になっているのだ。脚本こそ本の作者だが、配役、演出あるいは出演までできちゃうのだ。頭の中で作った自主制作映画を頭の中で上映するのだ。すでに画像が出来上がっているテレビや映画（本物）よりも、自分で作り上げた世界なのでどっぷりと入り込めるのである。この仮想体験こそが読書の魅力なのだ。

本を読むということは、たくさんの時間を費やし、確かに面倒くさく感じることはあるだろう。だけど、読み出せばその魅力に引かれ、あっという間に時間が過ぎる。そう、ハマってしまうのだ。ヒマさえあれば、ヒーローから名探偵、あるいは悪人にまでなれてしまう読書。読書ってスバラシイ!!

読書の魅力



2年 山根美円子

『花づくし』『朱夏』『天使の卵』これらを見てあなたは何のことなのかと首をかしげたでしょうか。実はこれらは三つとも学校の図書館にある本のタイトルです。

本を選ぶ時、最初に目に付くのは本の背に書かれたタイトルであることは言うまでもありません。本校の図書館は文学の棚は一般的な図書館と比べて少し占める割合が少なく思えます。しかし、狭い中でも私の注意を引く本は沢山あります。

皆さんはどんな時に図書館を利用するのでしょうか。この問いに対し、大半の人が「レポートの資料を探するとき」とか「テスト勉強をするとき」と答えるのではないのでしょうか。それはある意味素晴らしいことであり、もったいないことでもあります。

確かに本校の図書館の資料は沢山の種類があり、それを活用するのは良いことです。しかし、図書館は資料館ではありません。たまには資料の棚ではなく文学の棚に足を運んでみませんか？

映画やテレビドラマの原作本を読んだことがあるのでしょうか。現在、本校の図書館にも『リング』『Shall we dance?』等、多くの本があります。読書なんて面倒だと思っている人は、こういう本から読んでみてはどうでしょうか。何か面白い発見があるかもしれません。

読書というものは、そう難しいことではありません。本さえあれば誰にでも出来ることです。さあ、五百円玉を握り締めて書店の文庫本の棚の前に立って見て下さい。きっと、あなたが読みたいと思える本が見つかるはずです。

趣味を持つこと



会計課 東 嘉美

エンジニアをめざす高専生に文科系の素養がないかといえば、そんなことはない。要は、心がけだ。高専の先輩に、小説家の谷恒生、丸山健二氏等の著名な人がおられる。こうした方々は、才能もさることながら人並み以上に感性を磨かれたに違いない。

感性とは、ものの感じ方である。感性を磨くためには、まず、読書をするを勧めたい。読書により、間接的な経験をより多く積むことだ。次に、いい音楽を聞いたり、美術に親しむことによって情操を高めることも大切だ。そして、そのような活動の中から自分の仕事とあまり関係のない分野の趣味を持つことだ。

高専学生の時代に何か好きなことを1つ見つけて、それを毎日30分間続けると達人になれる。私事

であるが、筆者は、稼業の傍ら油絵を続けている。きっかけは、絵を描いている友人を見て自分も描いてみたいと思ったことであった。友人に絵の先生を紹介してもらって、いい仲間の中で思いっきり描くことが出来た。独学は、天才以外の者には難しい。師との出会いが全てと言ってもいい。また、やる以上は、一生懸命やらないと金と時間の無駄遣いだ。筆者は、おかげで、今年8回目の日展入選を果たせた。

就職し、仕事を続けているうちに壁にぶち当たることは誰にもあるだろう。それを発想の転換や軌道修正によって乗り越えなければならない。そんな時に、趣味で培われた瑞々しい感性が助けとなるのではないかと。平素からいろんなことに好奇心を持つとそれが肥やしになって視野が広がるものだ。偶然性とかとんでもない間違いがヒントになって成果につながるがあると高名な科学者も言っておられる。仕事に追われて何もできない会社人間で終わるのは寂しい。生涯を通じての趣味を持つことによって交友関係が広がる。自らの教養を高める道も開けてくる。学生時代に何かテーマを見つけるとよい。若い時に始める程上達も早いから。

平成27年度 読書感想文優秀作

- S 2 平田 真也「『二十四の瞳』を読んで」
- 村岡 大輔「『人間失格』を読んで」
- 中山 真澄
「『死んで私が体験したこと』を読んで」
- M 2 高田 大輔
「『いじめ14才のメッセージ』を読んで」
- 金本 真幸「『坂の上の雲』を読んで」
- I 2 高原 渉「『死の医学への日記』を読んで」
- 原山 陽祐
「『わたしたちを忘れないで ドイツ平和村より』
を読んで」

- S 1 岡 直樹「ああ無情」
- 早柏ちひろ「白い帆は青春のつばさ」
- M 1 今岡 由佳「『アルジャーノンに花束を』を読んで」
- 豊田 真之「『神々の指紋』を読んで」
- I 1 井手由美子
「『だから、あなたも生きぬいて』を読んで」
- 澤田 章太「『ハッピーバースデー』を読んで」
- 村上 智世「『フォレスト・ガンブ』を読んで」
- 森浜 千絵
「『だから、あなたも生きぬいて』を読んで」

編集後記

学生の活字離れ（学生に限らないのかも知れない）が言われて久しいが、一向に改善のきざしはないようだ。一昔前、学生が愛読していた文庫本の売れ行きがあまりよくないと聞けば、本代が高くつくことがその原因とも思われない。種々の雑誌が比較的よく売れているという情報もある。ゲームに時間をとられるのであろうか。原因がいろいろ取りざたされているようであるが、活字を読むという相当に時間を要する作業に耐える根気がなくなっているのではないだろうか。とすれば、自分が、多少とも興味を感じる分野の本に根気強く取り組んで行く他はないのではないかと。本を読むという作業に慣れる努力をすところから始めるということである。短時間で簡単に結果の出る事しかできない者は、どこに行っても、何をやっても満足な結果は出せないであろう。社会人として通用しないという事は自分自身にとっても非常に寂しい事ではないかと思われる。努力を惜しむ事勿れ！